

327
725

明治
天皇
御製
百首

致侍講本居豊穎謹註



始





神製

天津神一冊六巻一々む我ら國
人あつるの多利
正二位 終身 持書

人の善悪のちがひ
は
まじりあはれ
その人のおこし
を

大正
4. 7. 22
内交





緒言

六合唯一ノ大徳ヲ有シ給ヒシ明治天皇ノ御製ハ拾數萬ノ多キニ達セリトイ
フ此御製ノ内國民ノ教化ニ必須ナルモノ百首ヲ奉拜シテ宮内省ヨリ土方
伯ニ賜ハリシモノヲ更ニ本會ガ請フテ出版セシモノナリ其謹解ハ今上陛下
ノ侍講タリシ故本居博士ガ絶筆ニシテ再ヒ得可ラサルモノナリ故ニ博士ノ
筆跡ヲ遺ス為メ一ニ自筆ヲ卷首ニ掲ゲ又本會ニ名譽會長タリシ伊
東元帥ノ筆跡ヲモ載セテ有志ニ頒タントス即本出版ハ本年御即位式
ノ紀念ヲ兼ネ明治天皇ノ御威徳ヲ廣ク國民ニ知ラシメント欲スルノ意ニ
アレバ普ク奉誦アラントラ望ム

大正四年御即位式ノ吉日

編者識

一本書ニ誤字其他ノ過失アラバ編者ノ罪ナリ幸ニ御注意ヲ惜ム勿レ再版ニ訂正ヲ為スベシ
一御製ノ御意味ハ深遠無慮ニテ容易ク解シ難キモ佛者カ經文ヲ暗誦スルガ如ク專信シテ絶エズ
奉讀謹誦スレバ自ラ了解シテ治國修身ノ礎トナルベシ



華原瑞穂國は日本國の古名なり
 みづの道とい皇祖以來我歴世此
 天皇の志ろ一めす所謂惟神の
 大道也一て天照大神の天壤無
 窮の神勅の動ぬことと一と
 まへり大をみい身ぬといふ言華
 の縁なり

これもおもひおれ一とて我國
 は常一に神の内守護あり
 ありとていふ言



あまの
 國のよろつやも
 れぬ道
 神とひささ
 のまめ
 あまの
 くまのやとのえは
 かみそむるうむ

神せよりうけ一宮だ
 ちのもりあて
 なまあまふけり
 日れもつ國
 昔よりなかれ院えき
 五十鈴川
 船のよるつ代も
 すまんまおしり



神せよりうけ一宮は天照大神の授け
 しのひー三種の神器なる日のもと
 國といふの國名のこなきを即ち神の
 本國の義ありをいふ
 五十鈴川も伊勢神宮の前なる川
 して流流えせぬ天照大神の
 皇統の一まちあてしゆるこ
 なまは川よせていふこなき
 してすまんといふも後にも萬世
 かけて天皇の知食まする水の
 縁を以てのこなきなり



檀原の
 とらつみおやれ
 みや柱
 いくそのーより
 國さうこかす
 うあつあー
 國さーら
 うさもいお
 茶えゆく世を
 なるはるうれ



檀原の遠つみおやの宮柱といふ大
 和の畝火の檀原ふさーめて皇
 居を定めいふひー神武天皇
 の大宮のこととて動くすといふ言
 宮柱に因あり
 國の柱といふは國體の基礎の
 鞏固なる謂をその前の宮柱とい
 こころやう茶えゆく世をわら
 いのこい歴世の天皇いふれあ
 とかうけてなるゆーまうて新皇
 いふよ大御慮なるい



大に於ける
 朝のかけを
 こゝろみふて
 世にくまも
 けりてか
 けい
 くまも
 ふくも
 こゝろ
 月のことくみ



高天原の天照大神の御食を承りし
 のる日どのいさるも大空に仰ぐ
 日輪のこの預あふれや大りのちとあるに
 まゆかゝる威の隆盛に進むまを
 たるは河がれと天宮の世も照臨
 きてて一れい希望の中河なり



かこつよのみを捉を
 思ふをたねの
 わかひなりける
 よきをとり
 あらむすてあつ國よ
 者らぬくにと
 ねはよもかれ



こゝろのみよのおきてと上代の天皇の
 皇祖の治則の義をて教育の初階
 皇祖皇宗の遺訓とのいさるも
 於て治三句以下も朕爾臣民と俱に
 拳々服膺して成其徳をいせしこ
 とを庶幾ふとありしなり
 前のことへ皇祖皇宗の治遺訓に遵
 ひ守りしをいふ勿論なり明治の大
 清代之始に下賜ひし五箇條の大
 清誓文も舊來の陋習を破り天地の
 公道に基くしとも知識を世界に求
 め大に皇基を振起せしなりとも宣ひし
 りてありしなり
 ら國威を發揚せむと希ひしなり大
 清慮を陳へしなり



まじひおちからめだま
 くらねあ
 たみのあやめ
 あつゆふこ
 あつゆふこ
 おちあつたあつた
 杖のまつりこ
 いかにあつむ



まじひおちからめだま
 くらねあ
 たみのあやめ
 あつゆふこ
 あつゆふこ
 おちあつたあつた
 杖のまつりこ
 いかにあつむ



まじひおちからめだま
 くらねあ
 たみのあやめ
 あつゆふこ
 あつゆふこ
 おちあつたあつた
 杖のまつりこ
 いかにあつむ



まじひおちからめだま
 くらねあ
 たみのあやめ
 あつゆふこ
 あつゆふこ
 おちあつたあつた
 杖のまつりこ
 いかにあつむ



まじひおちからめだま
 くらねあ
 たみのあやめ
 あつゆふこ
 あつゆふこ
 おちあつたあつた
 杖のまつりこ
 いかにあつむ



傳へきとして
 くまの瘡と
 好いみきり
 ひしよの女代の
 みこまけふみ
 くの世に
 おもひをりて
 いそれふみ
 ふうにふみ
 よもそれふみ



このかみ
 みるきたりた
 新しきよれ
 こもまけふみ
 多めいれく
 耳あゆまは
 みこまけふみ
 導くかみの
 あはれかみけり



ひしよの女代とはいかへみきりてん天
 皇をよまはさきまみこののりふら
 招勅を集めし書といふ如くなれと
 こい台事記に天武天皇の勅より輝田
 阿礼の暗記を明天皇の勅より大友方侶
 り筆記に日本書記に元正天皇の勅に
 て舎人親王の撰録せられ續日本紀に
 下も代々の天皇の勅をうけて録した
 るなれこれの史をよめていささか
 おもひ



こい今世のあつたをよめていささかの世
 こい今世のあつたをよめていささかの世
 こい今世のあつたをよめていささかの世
 こい今世のあつたをよめていささかの世
 こい今世のあつたをよめていささかの世



よは前のくらしはよま今世の事
 可を得失の定めしきいあひい
 一の書を讀みて今世の事
 よりよま今世の事
 のいささか



明治の大代とて外國の事
 らいんやうなせりより何事とい
 や進みよま今世の事
 こい今世のあつたをよめていささかの世
 こい今世のあつたをよめていささかの世
 天照大神素戔嗚尊大國主命
 かの御事とて考へ合せてよ
 ませり



我らおのまゝ
 くらゐのはて
 すすめて
 よろこぶ神を
 すまひます
 ちかひ
 くらゐのまゝ
 まるはらの
 月日はたの
 もたふとあは



前より来たつひにわがらよめやとい
 の人思ふせるゆ業もあつた
 ちかひ國のこゝろ民の為
 おもひ ちかひ ちかひ
 まるはらの千と千と
 ちかひ 待ちを
 まる大徳慮



國民を

ひつひ
 ちかひ
 くらゐの
 世に
 ちかひ
 われを
 臣のちかひ



勅諭に我ら臣民克く忠不克く
 忠に徳兆心を一にして
 の美を濟せるはこれ我ら國體
 の精華とのこゝろ



くらゐの世に現身の人の世といふ
 こゝろこれと此は繁華を
 の枕詞に今の世を
 まるはらの世に
 ちかひ
 臣のちかひ



いらにせむ
 ひらちゆいも
 いちか
 くらんぼ
 いらんぼ
 天也
 ふまはふま
 ちまはま
 みちのひらけ



あんけり
 きちんまに
 民のまはひ
 すまふい
 あんけり
 くふふま
 まんま
 まんま



外国々のまひらけりあうつ
 学術年を逐ひて精一一人の知
 識をきく進みゆくまはひ
 まはひのまはひまはひ
 まはひのまはひまはひ
 の五箇條のまはひのまはひ
 國體の大本の變更まはひ
 まはひのまはひまはひ



民のかまの細くまはひ
 まはひて國のまはひ
 まはひのまはひ
 合々



人氏をばりまはひ
 國の古言のまはひ
 まはひのまはひ
 殖産興業まはひ
 國をまはひ
 まはひのまはひ
 國を國民のまはひ
 まはひのまはひ
 法詞中録あり



新まりの
 畑も田も
 おもひれと
 ひたのあいら
 なく
 山のお
 峰のま
 いつ
 世も
 人



新まりの
 新開の地も
 荒野の
 ちの
 野子
 の
 後村
 の
 と



あいら
 おもひ
 思
 民の
 十の
 夏の
 わさ
 世の
 こ



あいら
 おもひ
 思
 民の
 十の
 夏の
 わさ
 世の
 こ





あ
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす



あ
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす



あ
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす



あ
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす
 あらまわす



あちつ〜
 市はあまの
 風はあまの
 ちのせきして
 思ふよき
 思ふよき
 あか民のよ
 うはらうい



賤の住む
 あらわれさるの
 みてそね
 あめかせあら
 時さるる
 桐火桶
 かきあてれ
 すきよお
 賤の伏や



農氏(あまの)の
 市(いち)の
 風(かぜ)の
 ち(ち)の
 せき(せき)して
 思(おも)ふ
 よき(よき)
 思(おも)ふ
 よき(よき)
 あか(あか)民(たみ)の
 よ(よ)
 う(う)は
 ら(ら)う(う)
 い(い)



賤(せん)の
 住(す)む
 あ(あ)ら
 わ(わ)れ
 さ(さ)る
 の(の)
 み(み)て
 そ(そ)ね
 あ(あ)め
 かせ(かせ)
 あ(あ)ら
 時(とき)さ
 る(る)る
 桐(きり)火(び)桶(づつ)
 か(か)き
 あ(あ)て
 れ(れ)
 す(す)き
 よ(よ)お
 賤(せん)の
 伏(ふし)や



冬うのま
 わおれふすまがら
 かやねてよ
 おふまを
 ねたむじふら
 ちうんつれ
 民よこらち
 あやまら
 國ふちから
 しんせん



冬うのま
 わおれふすまがら
 かやねてよ
 おふまを
 ねたむじふら
 ちうんつれ
 民よこらち
 あやまら
 國ふちから
 しんせん



何のこゝろをなすは
 の力をかゝりあれた
 して大切を成す
 奨励ぬら



國民といふは
 あり文武の職もあり
 高の別男女老少のおも
 身をつてま
 身を
 力を



ともろともろ
 こゝろあひつゝ
 くらゝの
 睦みあふせ
 たれかける
 柳葉ふ
 かけー鏡と
 かみみあて
 ひも心を
 みのけまおひ



朋友お信一て互に誠意を以て
 しあひあひつゝこゝろあひつゝ
 こゝろあひつゝの世に同盟の會社あり
 り同盟の友を會ふもあつたの
 親睦せらるるをよからしむおひ
 とせらるる

鏡は清く明くやまのなれまこ
 れを模範として人もこゝろあひ
 りまはすつゝこゝろあひつゝ
 あつたつたなつたつたに柳葉ふ
 けー鏡と天恩大神のまを
 前もあつたつたつたの
 なるつたつたつたつたつた
 まつたつたつたつたつた



ともろともろ
 かき濁ーけり
 やまの
 清まをさす
 人の心を
 真本と
 かけー鏡と
 動かす
 よこまを
 つかつかつか



おのれつたつたつたつたつた
 を涙を流して濁つたつたつた
 清ま本家のつたつたつたつた
 きれつたつたつたつたつた
 して道なつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつた

真本種はあつたつたつたつた
 心のつたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつた



おすく〜
 かの得のいかに
 世の中
 人のひとも
 ちかひま〜
 家とて
 あゝのいかに
 身なりとて
 ひのいかに
 ちかひま〜



人の世に...
 ...
 ...
 ...
 ...

あらぬ...
 ...
 ...
 ...
 ...



おれ中
 人のいかに
 身は...
 ...
 ...
 ...



...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...



おのれを
おのれのまへに
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを



おのれを
おのれのまへに
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを



おのれを
おのれのまへに
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを



おのれを
おのれのまへに
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを
おのれを



りんごのつぼみ
 人のこころを
 神さすはるのよ
 りらーみちを
 りんごのつぼみ
 人のこころを
 神さすはるのよ
 りらーみちを



清潔に—て大地—を
 りんごのつぼみ
 神さすはるのよ
 りらーみちを
 良薬の昔—りんごのつぼみ
 練事—を—りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 か—りんごのつぼみ



りんごのつぼみ
 あらね方あ
 りんごのつぼみ
 教へか—りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ



りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ
 りんごのつぼみ



思ふに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに



あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに



あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに



あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに



あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに



あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに
あはれかたに



山さかへ
 人のちからを
 つかせしめ
 つかせしめ
 つかせしめ
 事あるは
 ありしは

いかに力ある人か
 精神なりての
 ことありしは
 合せて大志の
 ひも

世に忠臣ありしは
 氣清く徳高し
 事ありしは
 ありしは



世のなかの
 人におくれを
 すまむ時
 世に
 活るは
 世に

人は常に進取の氣を以て
 進むべき時に進まざれば
 は時世におくれば無用の
 人とわらふことあり

活る氣を忘れざらんば
 勝てることありしは
 油断大敵なりしは



いづく〜と
 めそのあまりに
 ちて〜これ
 庭の〜
 おろ〜にすれ
 わか竹れ
 老いゆ〜末を
 ち〜よよ
 庭の〜
 ち〜よすれ



いづく〜いづく〜といづ〜同じ
 く慈愛の意めてい賞美の意度
 ね〜いふ家庭の教訓といふ親
 しい者吾子を愛する餘りに
 庭訓を忘るる〜ある〜
 い〜
 これも家庭の訓誡を忘るる〜
 きゆる〜父母の爲にいず〜め
 まり若竹といふに其子のい
 幼稚さ〜とよ〜い
 い〜い〜竹の縁起〜
 竹〜い〜あり



た〜
 ち〜
 男女おみちを
 い〜
 人〜
 お〜
 ち〜



男と女との別ある程なれは
 ち〜い〜
 の注意を〜



この本邦の女子学院長にめされ
 る時、婦人の教育もやあらんや
 親の師といひなれい〜ある
 人を教の教や〜い功労ある人
 物を若師といふ大心よや又若
 の志匠よとさる育の模範とす
 る大少慮い〜い〜
 い〜と〜
 の方〜
 て〜
 て〜





多らちの
 松やのら
 紅くち
 國よ
 良き友よ
 交るひ
 おねのら
 身のおもひ
 かりけり



孝道
 孝道
 孝道
 孝道
 孝道
 孝道
 孝道
 孝道



常身の
 や
 つみてこと
 人のよ
 のよかりけれ
 けり
 す
 おい人の
 ちのちの
 ちのちの



常身の
 や
 つみてこと
 人のよ
 のよかりけれ
 けり



常身の
 や
 つみてこと
 人のよ
 のよかりけれ
 けり

大空よ
 こゝろをみゆる
 高ねを
 のびに
 みちを
 ちか
 し
 い
 り
 け
 り
 か
 ら
 せ
 り



大空のよけい
 こゝろをみゆる
 高ねを
 のびに
 みちを
 ちか
 し
 い
 り
 け
 り
 か
 ら
 せ
 り



人みね
 こゝろをみゆる
 高ねを
 のびに
 みちを
 ちか
 し
 い
 り
 け
 り
 か
 ら
 せ
 り



何事も合はぬ
 こゝろをみゆる
 高ねを
 のびに
 みちを
 ちか
 し
 い
 り
 け
 り
 か
 ら
 せ
 り





甲けゆー
 みちふりてこも
 こころをよ
 つましくこも
 あふよわうらも
 積りてを
 拂ふふうー
 ちうはかりなる
 こころおしこ



前なる小車のある人の背若ふ
 おねーこころも大い歌の表面の
 一道路を歩むこころなをせと進
 歩開明のせなかりても傾性にあ
 るなうひなれいよーかこころんて
 事を行へる大い慮やうー



一小事とおもふこころ積りては
 遂に習ひ性となうて改めぬこ
 ころおふひなれいよそのせーだ
 と信む(き)よーを産ふこころ
 こころんていよーかこころんて



弓矢もて
 神は治め
 こころお人ま
 こころおこも
 心ゆるふた
 ますらこみ
 旅をゆくもあて
 ありふらうし
 白木の若外
 のこやかほく



弓矢のこころ國上やまの武をて
 まうこころまのこころ矢も弓矢か
 の名あり弓を引出しこころんて心
 ゆるふらこころんていよそのせーだ
 弓矢よいかよらららら高武の國
 風なれいよ平安のせまの武やうら
 こころんていよーかこころんて



軍旗授與武のこころんていよそのせーだ
 こころんていよーかこころんて

女らしきふる
 つるまね光
 世に輝やのせ
 わのいよこ人
 國のよめ
 あいふにれを
 りくもいさ
 これわすれを



これい銀ふよそく軍人を
 せんまーめいこまへ

戦場子臨みてく野蠻の
 行為をたよる仁義博愛
 の美德を金くまへん
 ちのいよこよてこれと軍
 人のきりこめいさ



國のよめ
 みちらにこころ
 なりけり
 けりたはるふ
 ちかひいよこ
 こらはみふ
 いよこねたふ
 ちかひいよこ
 ちかひいよこ
 小田守りしむ



義勇の心いよこめいさ
 軍と願ひ出する者も軍資
 金をたけけ一者も心の心を
 めてたけけいよこめいさ
 序歌ふやあまけむ

これい明治三十七八年の戦役
 のかり農民との上をたけし
 ちりあまこれいよこめいさ
 の景かまへ



國のつめ
 誓ひ一人に
 惜むあま
 ちよとあやれ
 こころちよとあま
 ちよりに
 ふのち根さの
 ちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま



言の葉を
 上よよほひて
 ちよとあま
 こころちよとあま
 いとよあまらほ
 ふみでけてみよ
 ちよとあま
 こころちよとあま



こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま



こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま



こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま
 こころちよとあま



天やこのよ
ひまをたてまつて
茂らせばむ
あの一さきまの
みちがしん
あこのよ
けりあひなり
外つたの
そ本のおも
おやもく



天やこのよ
ひまをたてまつて
茂らせばむ
あの一さきまの
みちがしん
あこのよ
けりあひなり
外つたの
そ本のおも
おやもく



いさかー
あふれ枝か
ふれぬ
あひのくも
あひのくも



いさかー
あふれ枝か
ふれぬ
あひのくも
あひのくも



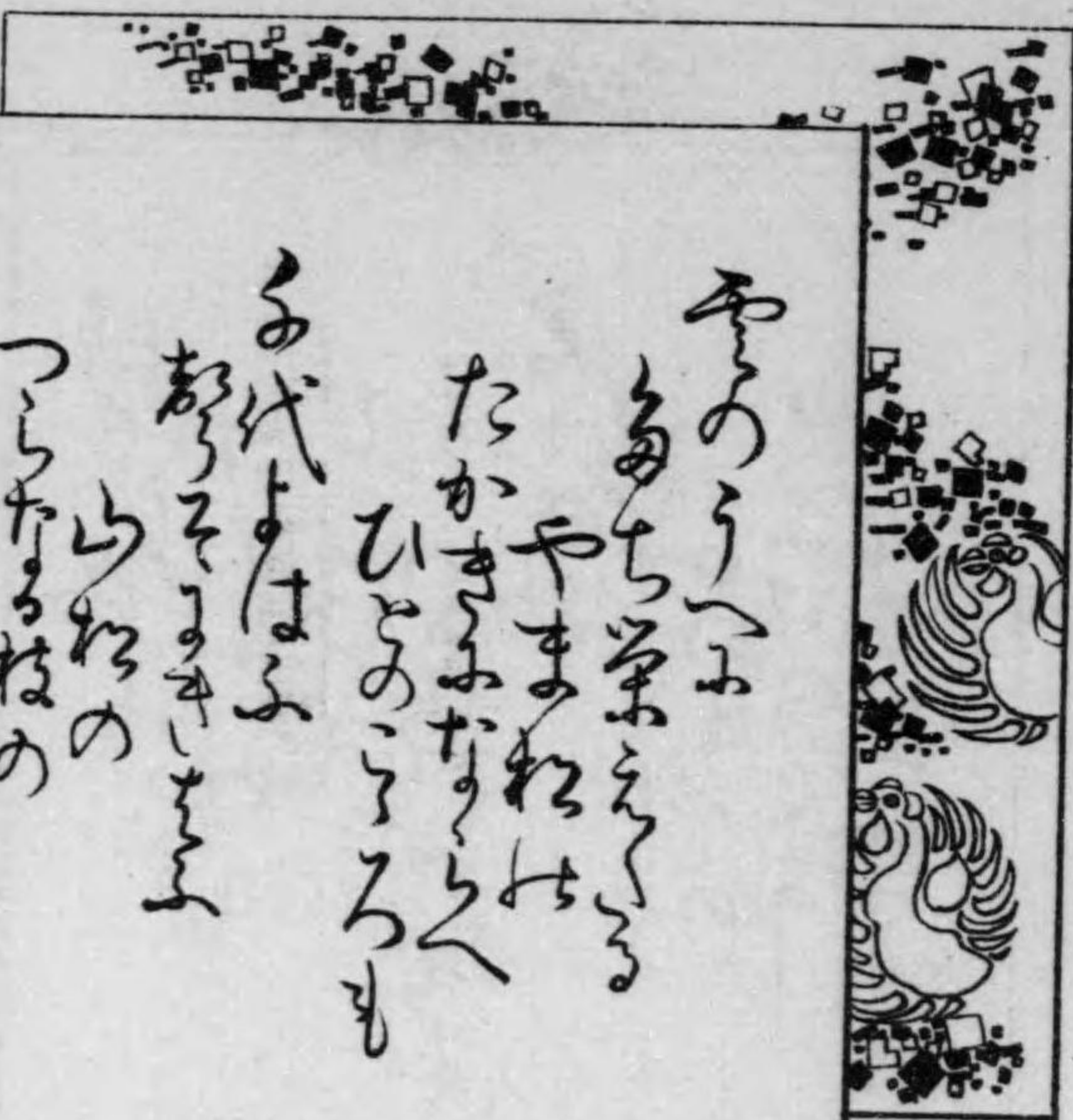
大空の
 ひろきよさ
 の
 いろは
 いろは
 いろは
 いろは



大空の
 ひろきよさ
 の
 いろは
 いろは
 いろは
 いろは



大空の
 ひろきよさ
 の
 いろは
 いろは
 いろは
 いろは



大空の
 ひろきよさ
 の
 いろは
 いろは
 いろは
 いろは





よりの海
 思ふ世に
 思ふ世に
 思ふ世に
 思ふ世に
 思ふ世に
 思ふ世に



四海兄弟とむしひあふ平和の
 世に
 世に
 世に
 世に
 世に
 世に

君臣の大義名分明確ありて
 古来亂る事なきは我が国の
 特色まで尚萬世の後うけて動
 く事なきよしの世なり



本會規則御希望ノ方ハ本部或ハ出版部ニ御申込アレバ郵送スベシ

本會重ナル名譽賛助員 (イロハ順)

公爵元帥	山縣有朋	子爵	內田康哉	男爵	尾崎三良
侯爵	井上馨	子爵	黑田清綱	男爵	九隆鬼一
侯爵	德川頼倫	子爵	福岡孝弟	陸軍中將	豐島陽藏
侯爵	花山院親家	子爵	藤波言忠	前文部大臣	奧田義人
侯爵	鍋島直大	子爵陸軍中將	三浦梧樓	陸軍中將	岡市之助
侯爵	久我通久	子爵	三島彌太郎	陸軍中將	落合豊三郎
侯爵	黑田長成	子爵	平田東助	陸軍中將	大澤界雄
侯爵	松方正義	子爵	杉孫七郎	陸軍中將	大谷喜久藏
侯爵	西園寺公望	男爵	濱尾新	陸軍中將	大迫尙道
侯爵	西郷寅太郎	男爵	加藤弘之	陸軍中將	大石正巳
侯爵	木戸孝正	男爵	周布公平	陸軍中將	神尾光臣
伯爵	板垣退助	男爵	園田安賢	海軍中將	川村宗五郎
伯爵	東郷平八郎	男爵	堤正誼	男爵海軍大將	加藤友三郎
伯爵	德川達孝	男爵	南部斐男	陸軍主計總監	上村彦之丞
伯爵	大隈重信	男爵	村木雅美	陸軍中將	辻村楠造
子爵海軍中將	中牟田倉之助	男爵陸軍中將			南部辰丙

陸軍中將	內藤新一郎	子爵陸軍大將	大迫尙敏	陸軍中將	一戸兵衛
陸軍中將	長岡外史	子爵	大浦兼武	陸軍中將	仁田原重行
陸軍中將	村田惇	子爵	岡部長職	陸軍中將	本郷房太郎
陸軍大將	上原勇作	子爵	渡邊國武	陸軍中將	隈元政治
陸軍中將	梅澤道治	子爵陸軍大將	川村景明	陸軍中將	山中信義
陸軍中將	楠瀬幸彦	男爵陸軍中將	山根武亮	海軍中將	八代六郎
伯爵海軍大將	樺山資紀	男爵海軍中將	眞木長義	海軍中將	藤井較一
伯爵	芳川顯正	男爵	牧野仲顯	前文部大臣	小松原英太郎
伯爵	黒木爲楨	男爵陸軍中將	福島安正	陸軍中將	秋山好古
伯爵	柳原義光	男爵陸軍大將	淺田信興	陸軍少將	佐藤正
伯爵	副島道正	男爵陸軍大將	安東貞美	海軍中將	坂本一
伯爵海軍大將	佐久間佐馬太	男爵陸軍中將	木越安綱	陸軍中將	濫谷在明
子爵元帥	井上良馨	男爵	北垣國造	陸軍中將	濫谷在明
子爵元帥	長谷川好道	男爵	澁澤榮一	陸軍中將	森林太郎
子爵陸軍大將	大島義昌	男爵	千家尊福	前遞信大臣	元田肇

(以下省畧)

大正四年七月二十日印刷
大正四年七月廿三日發行

定價金拾貳錢

不許
複製

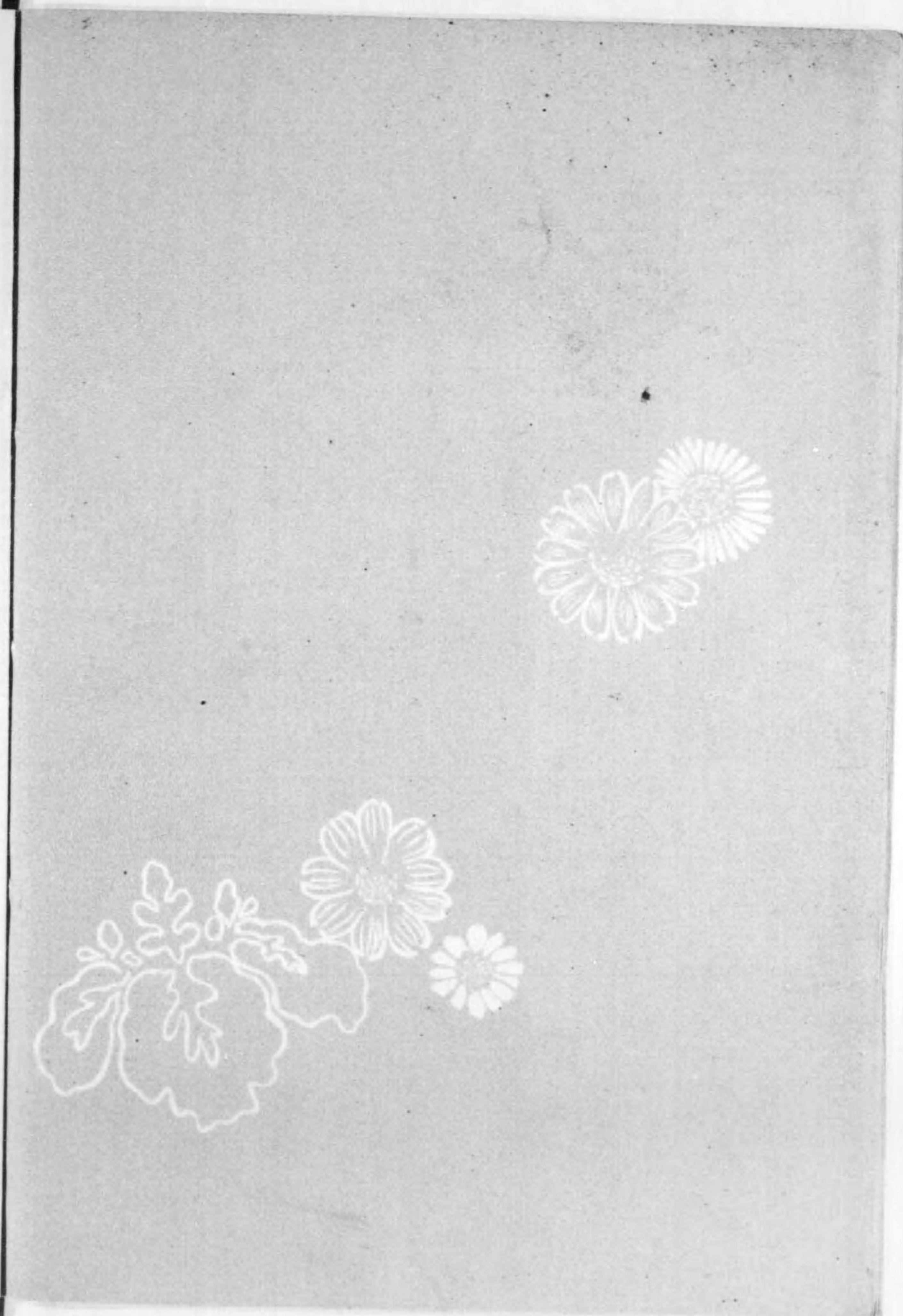
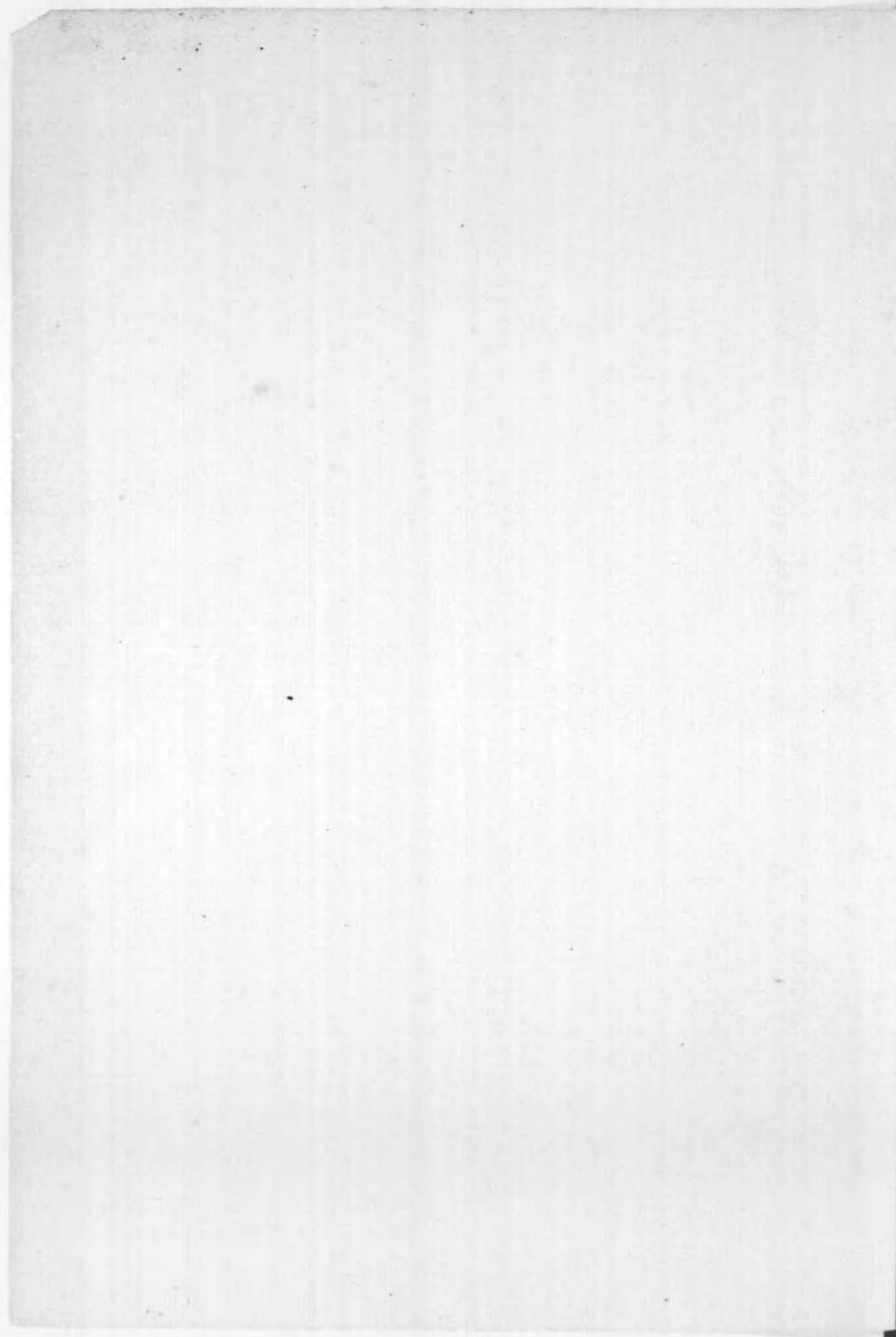
編者 大日本皇道實行會
兼發行者 代表者 木村知治

印刷者 小 林 清 太 郎
東京市淺草區藏前片町十番地

印刷所 小 林 印 刷 所
東京市淺草區藏前片町十番地

發行所 大日本皇道實行會出版部
全市神田區旅籠町三丁目十九番地

327
75



327
725

終

